からむし

69

麻生区文化協会会報

万福寺おやしろ公園

十二神社を取り囲む鎮守の森と四季彩の丘

新百合ヶ丘駅北口から数分歩くと川崎市アートセンターがあり、右側に世田谷通りに面した里山の庭園として存在しています。十二神社は正徳元（1711）年に建立以来、万福寺地区の氏神様として長い歴史の中で大切に護られていましたが、平成17（2005）年5月に新社殿が落成され、お正月の初詣には参拝客で賑わいます。おやしろ公園では4月から5月頃にツツジの花が咲きほころび、爽やかな薫りにさそわれ散歩コースになります。8月には夏祭り・盆踊り大会が子ども達の太鼓の演奏で盛り上がり、大勢の老若男女の方々が盆踊りを楽しんでいます（今年はコロナの影響により残念ながら中止となりました）。四季彩の丘では小さな子ども達が芝生の中で跳んだりはねたり楽しそうです。おやしろ公園では、小・中学生が球技などで遊び友好を温めて、地域の方に親しまれています。新百合ヶ丘山手公園管理運営協議会はボランティアの皆様に支えられ、除草・花壇のお手入れをしています。

十二神社創建300年記念の碑

宇気母智大神（うけもちのおおかみ）は五穀と海山の幸をもたらした食物の神様です。古来よりこの付近一帯は米や野菜・養鶏・良質な炭と農業が盛んな食糧供給の地でありました。特に万福寺鮮紅大長人参は、ときの農林大臣賞を受賞しています。この地は農業を通じて地域の発展と自然環境の保守に貢献してまいりました。今は都市化が進み昔の面影はありませんが、いかなる時代でも食糧危機や自然災害にはおよそ無縁ではいられません。食の安全と食文化の継承・環境保全を永遠に祈念し、300年記念を祝い祭神が建立されました。

（絵と文／石原 順子）

からむし第69号のラインナップをご紹介します

P1 **麻生区の風物紹介**
今号は石原順子さんによる「万福寺おやしろ公園」です。ここにある由緒ある十二神社の賑わいと、地域の人々に親しまれている美しい公園、十二神社300年記念碑を紹介します。

P2 **コロナ禍における文化・芸術活動の支援**
川崎市市民文化局長の向坂光浩さんが、コロナ禍における文化・芸術活動のさまざまな支援を紹介します。

P3 **コロナ禍と麻生図書館**
川崎市立麻生図書館長の澁谷桂子さんが、コロナ感染防止対策をはじめさまざまな取り組みと奮闘ぶりを紹介します。

P4 **私の半生「趣味に生きて」**
麻生区文化協会副会長の山室茂樹さんが、水産養殖業・進学塾などの職業歴から、登山・茸採り・囲碁から俳句に至るまでの趣味歴を語ります。

P6 **麻生区文化協会の行事 再開**
「第36回麻生区文化祭」として行われた麻生フィル定期演奏会・詩吟大会・美術工芸展・洋舞・俳句大会の紹介に加え、「デッサン会」、コロナ禍により動画とパネル展示になった「あさお古風七草粥の会」の報告です。

P8 **会員の活躍**
佐藤勝昭さんの「第17回個展」、麻生の文化・芸術交流の場として企画された「カフェ・グランデあさお2020」、および写真愛好家による「あさお写遊会」の開催報告です。

文化協会のこれから
3月に開催される「アルテリッカ新ゆり美術展」と、4月の総会に引き続き行われる文化講演会「新型コロナウイルス感染症の現状と市民生活」の紹介です。

コロナ禍における文化・芸術活動の支援

川崎市市民文化局 局長　向坂 光浩

はじめに、麻生区文化協会の皆様には、新型コロナウイルス感染症により、活動等に多くの制約がかかる中、文化芸術によるまちづくりの推進に大きなお力添えをいただいておりますことに、心より感謝申し上げます。

さて、川崎市におけるこれまでの新型コロナウイルス感染症を発端とする文化芸術活動への支援の取り組みですが、国等において個人の生活や事業者の事業継続などに関する支援制度が設けられていることを踏まえて、文化芸術活動による「まちづくりの推進」を基本とし、「新しい生活様式」を見据えた事業を実施したところです。

一つ目としては、「川崎市文化芸術活動支援事業」です。この事業は、国の地方創生臨時交付金を活用し、新型コロナウイルス感染症の影響により、活動の場を制限されている文化芸術の担い手を支援するとともに、市民が文化芸術に触れる機会を提供するため、「本市ゆかりの著名人からのメッセージ」や「文化芸術作品」、「子供向けコンテンツ」の動画をウェブ上で公開するとともに、動画の制作に係る対象者に奨励金を交付する取組です。5月25日～6月10日の募集期間に、283件、670人の応募があり、住所要件などを満たさなかった方や動画の提出を辞退された方を除き、586人に奨励金を交付し、YouTube「川崎市文化芸術応援チャンネル」において、246作品を公開しているところです。麻生区に縁のある方も多数出演されていますので、ぜひともご視聴ください。応募者から「この動画配信をきっかけに新たな活動に繋がった」などのうれしい報告も入ってきており、市内で文化芸術に携わる多くの方を知っていただく場づくりにもなったかと思います。このような場の活用により、今後もさまざまな交流が生まれることを期待しています。

二つ目としては、「フランチャイズオーケストラへのマッチングギフトコンサート」の取り組みです。この取り組みは、本市フランチャイズオーケストラである東京交響楽団の活動機会を創出するとともに、市民が音楽芸術を享受する機会の促進を図るため、ウェブコンサートを実施し、視聴者等から寄付を募り、文化振興基金を活用し、寄付金額相当分のコンサートチケットを市が買い取り、市民を招待するものです。6月～7月の間にウェブコンサートを3回開催し、9月末日まで無料配信した結果、総視聴者数は6万人を超え、約1700万円の寄付をいただきました。これにより、市では上限額の1000万円相当のチケットを購入し、今後開催されるコンサートへの市民招待を実施いたします。この取り組みは、ウェブコンサートによる視聴者の大幅な拡大とマッチングギフトの手法等による市民とともに文化芸術活動を支える仕組みづくりへの可能性を感じさせるものでした。

三つ目としては、オンライン配信及びデジタル技術の活用促進の取り組みです。川崎市岡本太郎美術館ではモデル事業として、一般社団法人VR革新機構の協力により、バーチャルミュージアム「太郎VR美術館」として、企画展「音と造形のレゾナンス―バシェ音響彫刻と岡本太郎の共振」のVR映像を5月8日～8月18日にホームページで配信したところ、約16万件のアクセスがありました。第2弾として、内容を次に開催した企画展「高橋士郎 古事記展 神話芸術テクノロジー」に更新し、「常設展」や屋外の石段から美術館の景観と「母の塔」も3D映像で再現しました。「太郎VR美術館」は11月20日に終了しましたが、現在は、昭和45（1970）年の大阪万博当時の太陽の塔をCGで再現した「蘇るVR太陽の塔ver.3」をYouTubeで公開しています。なお、岡本太郎美術館では継続してVR技術の活用について取り組んでいます。ミューザ川崎シンフォニーホールにて開催しました「フェスタサマーミューザKAWASAKI2020」では、7月23日～8月31日に全17公演をオンライン配信し、総視聴者数は約1万2千人となりました。一部の公演を除き、有料映像配信を実施し、貴重な収入源となりました。この他にも、例年開催しております「アルテリッカしんゆり2020」、「かわさきジャズ2020」等において、日程や会場、演目の一部変更、ガイドラインに則した感染予防対策など、関係者の皆様の大変なご努力と創意工夫により、各イベントを実施いただきましたことに敬意を表するとともに、感謝申し上げます。

文化芸術は、人間らしく豊かに暮らすために不可欠なものであり、生活の質を高める重要な役割を担い、持続的に発展する都市をつくり出す源となるものです。新型コロナウイルス感染症の収束の兆しが見えない中ではありますが、引き続き、適切な感染予防対策と、「新しい生活様式」に対応した活動の支援に取り組み、本市における文化芸術によるまちづくりの推進に努めてまいります。

昨年1月に国内で新型コロナウイルスの感染者が初めて確認されてから、1年が経過し、再びの緊急事態宣言が発令されている中での執筆となりました。この間も世の中の動きが目まぐるしく変化しており、お読みいただいている時点で内容に相違があることも考えられますので、その際はご容赦ください。

最後に、私事ではございますが、3月末日をもって定年退職を迎えます。麻生区文化協会の皆様には、平成18年に麻生区役所企画担当主幹として着任して以来、長期にわたりお付き合いをいただきましたことに、この場をお借りして、お礼申し上げますとともに、貴協会のますますのご発展をお祈り申し上げます。

コロナ禍と麻生図書館

川崎市立麻生図書館 館長　澁谷 桂子

令和2年、3年と続けて緊急事態宣言が発出され、落ち着かない日々を過ごしているが、1年経過したこともあり、図書館とコロナ禍について振り返りをしてみたい。

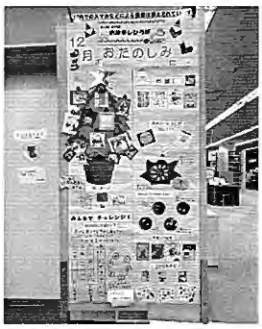
令和2年2月最終週から、各種イベントは順次中止となり、3月2日から「滞在を伴わない来館」サービスを提供することになった。閲覧席と、全新聞・雑誌の最新刊の提供を中止する一部制限開館となった。この期間、市立図書館では来館者に、直接書棚に入って自分自身で本を選ぶというサービスを提供し続けた。近隣の自治体が予約資料のお渡しのみというサービスへの変換を図る中、「自分で読みたい本を手に取って選ぶことができる」という、日常におけるあたりまえのすばらしさを改めて実感された方も多かったことと思う。

写真① 図書館職員制作の閲覧席パーテーション

4月7日の第1回緊急事態宣言発出を受け、11日からは臨時休館となった。昭和60年に開館して以来、こんなに長期間にわたる休館を実施したことはなく、せっかくの機会と前向きにとらえ、職員は毎日出勤し、開館している状態では行うことができない業務を行った。

木製の閲覧席の机面を磨き、書棚や机の表面に空いていた穴をパテで埋め、がたつきや歪みのある什器をしめなおす営繕作業の他、開館に向けて閲覧席パーテーションを組み立て（写真①）、カウンターには飛沫防止のビニールカーテンの設置等を行った。その他、書棚側面や上部サインの再作成、書庫（館内にある本の倉庫）内の本の移動や整理整頓等、月に1日しかない休館日では気づいていてもなかなか手が回らなかったことを改めることができた。

5月25日の宣言解除の次の日から、臨時休館中に用意ができていた予約資料の提供サービスからスタートし、6月1日からは3月と同じ一部制限開館となり、7月1日からは閲覧席を58席から38席に減席提供し、イベントを一部制限した開館が続いている。子どもたちが楽しみにしているおはなしひろばが開催できていないが、ボランティア発案の「きょうはおうちでおはなしひろば」という企画展示を月替わりで行っており好評である（写真②）。7月下旬には、本の消毒器も設置したので、図書館の本の貸出時、気になる方はぜひご利用いただきたい（写真③）。



写真②「きょうはおうちでおはなしひろば」12月の展示

図書館の利用者数や貸出冊数は、前年度並みには戻っていないが、貸出の傾向には多少変化が見られる。旅行ガイド等はあまり動かなくなり、そのかわり医療・健康の本や生き方に関するもの、過去の名作と言われるもの、ボリュームのある本の需要が伸びている。秋に行われた読書週間を前にした世論調査でも、コロナ禍で読書の時間が増えたと回答した方が12％増、直近1カ月に限れば25％増との結果が出ている。出版販売動向で見ても、前年比でプラスという結果が出ており、私たちの生活の中で移動が制限され、時間に余裕が出た方が読書をされたのであろうと推察している。

令和3年の緊急事態宣言下でも利用者には短時間の滞在をお願いしているが、臨時閉館という措置には至っていない。1月初旬から貸出利用が増加しており、巣籠・ステイホームには本を読むことがありようの一つとして定着しつつあるようである。

コロナ禍の下での図書館を紹介してきたが、もう一つ図書館に働くものとして気になっていることがある。メディアは連日、医療体制の逼迫と経済を回すことという2本柱を掲げた報道をしているが、教育や文化がどうなっていくのかを取り上げられることはほとんどない。おそらく文化は経済が回らなければ後回しという考え方からきているのであろうが、このまま後回しでよいのだろうか。

写真③ 消毒器

図書館というところは、本や雑誌・新聞等の情報や知識の集積地であり、それは文化そのもので、文化的資源は志向や感情を支える力の根源となっている。図書館は文化の継承を担っており、知的な生産活動への寄与もその役割であり、その存在は重要であると考える。読書をするということで得られるさまざまな擬似体験や想像する力は、新しい生活様式に変わっても消えるものではなく、コロナ禍の下という今までと違う世界の中で、図書館の意義を改めて問われていると感じている。

緊急事態宣言下では、休館となり多くの皆様にご不便をおかけした。休館中に図書館返却ポストから返却された本にお礼の手紙や職員への励ましの手紙が添えられていたり、問い合わせの電話でいただいた温かい励ましの言葉等は職員の心の寄りどころになった。紙面を借りてお礼を申し上げたい。

まだまだ収束が見えない状況下であるが、一日も早いコロナの収束と、日常が戻ってくることを切に願う。

【最後に図書館からのお願い】

さまざまな感染対策を取りながら開館を続けていますが、来館館時には①マスクの着用、②最低限の滞在時間、③最低人数での来館、④最小限の会話での利用にご協力ください。

私の半生「趣味に生きて」

麻生区文化協会 副会長　山室 茂樹

私は現在、俳句誌「さざなみ」代表、そして麻生区文化協会副会長として活動させて戴いておりますが、どうしてこのようなことになったのか、考えると全く不思議なことです。そのことについて私の半生を振り返ることから考えてみたいと思います。まずは、ちょっと変わった私の職業歴から。

水産養殖業に携わる

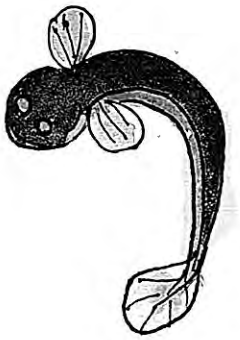
◆真珠の養殖

私は農学部水産学科の卒業でしたので、最初の就職先はオーストラリアが本社の、南洋真珠の養殖会社でした。南洋真珠とはアラフラ海で採れるシロチョウガイという大きな貝で、大きな真珠を養殖するものです。養殖場のあったのはオーストラリア西海岸の、人里からは千㎞も離れた小さな湾で、現地の山で木を伐り、それで筏を作り海に浮かべて真珠を養殖するのです。大変な重労働でした。そこで2年ほど働き、次いでニューギニアのポートモレスビーに移りました。そこに第2の養殖場を造ったからです。そこでは通訳を兼ねて2年ほど働き現地で退社、日本へ帰ってきました。

◆鰻の養殖

次いで就職したのは清水市の漁業会社。初めて会社が鰻の養殖に参入したいというので、そのお手伝いをすることになったのです。まず、大井川を渡った島田市に約1万坪の土地を購入、養鰻池を10面つくり、鰻養殖に携わっていた農民を五名雇い入れ養鰻を始めました。養鰻といっても、稚魚のシラス鰻（約6000尾で1kg）からの養殖ではなく、浜松の業者が1尾約5g程までに大きくした稚魚を買い入れ、それを大きな池で1尾約150gまで育て、それを鰻の問屋へと売却するのです。仕事は順調に進み3年後には年間約200トンを出荷するまでになりました。

しかし年々シラス鰻が採れなくなり経営を圧迫。そこでシラス鰻を求めて海外へ進出することとなりました。そこで目を付けたのが台湾で、私が台湾に渡り、養鰻の適地を求めて台湾全土を走り廻りました。ついに南部の屏東市の資産家の協力を得て、彼の持つ大バナナ園を養鰻池にすることで合意、ここに海外初の養鰻池を造りました。そこで現地の方に養鰻の指導すること2年余、仕事を終え日本へと帰ってきました。



◆ニジマスの海中養殖

今度は父の同級生が社長をしていた大手漁業会社へ入社。そこでは開発部に所属し、海洋法の施行に伴う漁業会社への制約に対抗すべく、新事業を模索しました。そこで考えついたのが、ニジマスを海で育てればシャケのようになるのではないかとの考えで、早速宮城県女川町のやや北方の雄勝湾の漁業従事者10名の協力を得て、そこの海面を大きな網で仕切り、そこに長野県で仕入れたニジマスの稚魚を入れ、海中養殖をスタートしました。餌は近くの海で採れる鰯等の稚魚です。ニジマスは驚くほど大きく育ち、ほぼシャケの大きさにまでなりました。魚肉に赤みを持たせるには餌に南氷洋で採れるオキアミを混ぜるのです。するとニジマスの魚肉が本物のシャケのような色になるのです。

こうしてニジマスの海中養殖そのものは大成功だったのですが、価格面が思うにまかせず、企業としては失敗でした。しかしその時一緒に仕事をした友人が、その養殖技術を持って南米のチリに渡り、現地でのシャケ養殖を成功させたことは大変なことで、それまで南半球には存在しなかったシャケが、私たちの食卓に上がるきっかけとなりました。私が水産養殖に携わったのはここまで。私は40歳になっていました。

進学塾を始める

会社を退社した私は、食べるために何かせねばと思い、とりあえず大手学習塾の講師に応募し採用されました。教えたのは英語に数学、算数で、特に算数は一生懸命勉強して教えました。教えた場所は調布に始まり神田、沖縄の那覇等で、最後は地元の登戸の大手塾です。そこの塾長のN氏とは同じ大学の出身でもあり、親しい友人となりました。そこで教えること3年余、N氏の勧めもあり独立して学習塾を経営することとなりました。地元の柿生に一軒屋を借り塾をスタートさせました。経営はいたって順調に伸び、最盛期には生徒数300名、講師の先生も10名を数えるまでになっていました。しかし良かったのは3年間ほど、生徒数は減少の一途を辿り、10年ほどで場所を変えざるを得なくなりました。地元の片平の友人宅を安く借り、講師も2人に絞って再スタートしました。しかしそこでの経営も5年程で行き詰り、最後は我が家の一部を教室に改造し、細々と塾を続けましたが平成12年をもって塾は閉鎖することとなり、それが私の仕事納めともなりました。

趣味に生きる

思い返してみれば私は本当にいろいろなことをして遊んで参りました。ベーゴマ・メンコに始まり、将棋、トランプ、花札、百人一首、五目ならべ、チェス、麻雀、パチンコ、囲碁等、屋外では魚採り、栗ひろい、山登り、茸採り等と、よくまあ遊んできたものと感心するばかりです。

◆登山

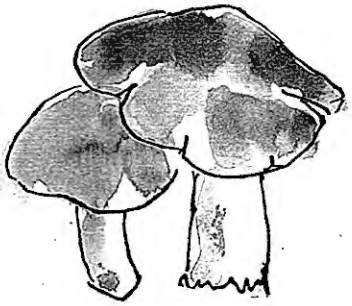
私は高校、大学と山岳部に所属していました。その後、社会人になってからも含めて登った山々は、北岳、穂高岳、

槍ヶ岳、荒川岳、赤石岳、塩見岳、仙丈ヶ岳、立山、剣（ツルギ）岳、甲斐駒ヶ岳、白馬（シロウマ）岳、金峰（キンプ）山、瑞牆（ミズガキ）山、浅間山、燧（ヒウチ）ヶ岳、至仏山、大菩薩嶺、丹沢山、三ツ峠などで、北海道の十勝岳にはスキーで登りました。重たいザックを担いで、よくぞ登ったものだと我ながら感心しています。

絶壁のザイルに憩ふ剣ヶ峰

◆茸採り

茸採りは信州に住んでいた小学校低学年の頃に父に教わって以来70年余り、毎年秋になるのを待って続けてきました。嬉しかったことに昭和30年代までは麻生区でもいろいろな茸が採れたことで、ナラタケ、ムラサキシメジ、タマゴタケ、ハナイグチ、ウラベニホテイシメジ等が採れました。またキノコの女王といわれるキヌガサタケ、王様といわれるオオモミタケも採ったことがあります。



ウラベニホテイシメジ

特に私が毎年狙っていたのは、ウラベニホテイシメジです。麻生区で採れなくなってからもこのキノコを求めて各地の山を廻り、裏丹沢の道志川沿いの山に群生地をみつけ、20年余り通い続けました。

75歳を過ぎて山に登れなくなってからは、富士の裾野でハツタケ、ハナイグチ等を採ったのが、私の最後の茸採りとなりました。キノコさん有難う。

五度来て五度迷へり茸山

◆囲碁

私と囲碁との出合いは高校3年の時です。友人と2人でルールを覚え、19路の碁盤を紙に写し、その紙に鉛筆で黒石・白石を書き、囲碁の真似事をして遊んだのです。大学に入ると正式に囲碁を学び、主として新宿の碁会場で腕を磨きました。9級でデビューしたのですが自分でも驚くほど急激に強くなり、1年で初段、4年時には最高位の6段にまで登り詰めていました。

この囲碁のおかげで会社に入社後は大きな顔ができ、水産会社囲碁大会の団体戦では3年連続優勝を果たすなど活躍したのも懐かしい思い出です。今でも碁会所で指したり、友人を家に招いて指したりして楽しんでいます。たぶん麻生区では私が一番強いかも？誰か私に挑戦する方はおりませんか。

碁敵といざ開戦の夕薄暑

◆私と俳句

父が文学者であった関係上、文学との関わりは意識的に断っていました。その大変さを見知っていたからです。そんな私が俳句を始めるきっかけとなったのは、平成5年の12月、友人と登った金時山です。純白に輝やく新雪の尾根道、正面に聳える白銀の富士山の雄姿に思わず口に上ったのが五七五の俳句でした。

新雪に輝く尾根や富士真近

そんな句でした。翌日に我家を訪れた友人が小さな俳句の会を主宰されており、私も末席に加わりました。全くの独学で俳句らしきものを作っていたほぼ2年後の平成8年2月、偶然にも地元の俳誌「さざなみ」の主宰、笠原古畦氏にお会いする機会を得ました。私が「先生、どうしたら良い俳句ができるのですか、秘訣があったら教えてください」とお聞きすると先生は、「そんなものは無いよ、ただ一緒になってよい俳句ができるよう勉強してゆこう」とおっしゃったのです。その飾らないお人柄に惹かれ、「さざなみ」に入会し俳句の勉強を始めることとなりました。

ほどよく歳が離れていたせいか主宰には、ことのほか可愛いがられ、お体の弱かった主宰のお仕事を手伝うようになっていました。平成14年には編集長に抜擢され、平成27年よりは古畦氏の後を継いだ池内代表に代わり「さざなみ代表」に就任し、現在に至っています。「平明にしてテメエの面のある句」それが私の作句上のモットーです。

私の好きな句を五句。

酌む酒は春の燈のもと大吟醸

雲と湧く善男善女花火の夜

蟻走るいつものような一大事

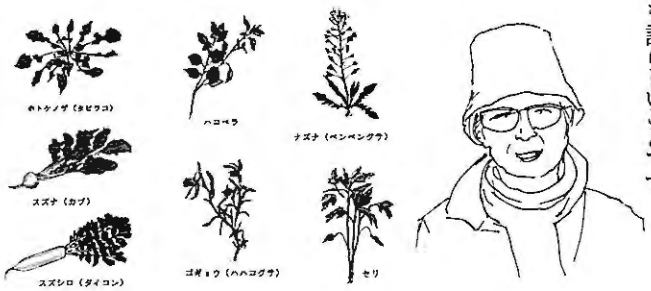
小さきはまた蹴飛ばされ蟇の恋

飲み会に財布忘れて四月馬鹿

俳句を続けてきた上での楽しみの一つは吟行と称する小旅行に仲間と一緒に行くことで、晩秋にバスを借り切っての1泊2日の旅です。温泉地を訪れることが多く、多くの景勝地を廻ったことは本当に楽しく私の財産の一つとなっています。

私と麻生区文化協会

俳句がとりもつ縁で私が麻生区文化協会、アカデミー部に入会したのは平成20年頃、始めは俳句大会のお手伝いなどしていたのですが、やがて本部役員となり、いつの間にか副会長の大役を仰せつかっていました。現在担当しているのは「俳句大会実行委員長」と「あさお古風七草粥の会」の実行委員長です。しかし実行委員長というのは名ばかりで、実質的な仕事は他の役員さん任せというのは恥ずかしい限りですが、どうにか大役を果たして現在に至っています。麻生区は本当に文化度が高く、その一翼を担っていられるのは、何とも誇らしいことです。



麻生区文化協会の行事 再開

コロナ禍で4月下旬に予定していた「総会」、7月の「デッサン会」、7～8月の「夏休み親子教室」を中止や延期していた文化協会行事も、感染予防に工夫をして10月から再開しました。麻生市民館にて、それぞれ「密」にならないように工夫をして開催した麻生区文化祭の各部門やデッサン会等の報告です。

第36回 麻生区文化祭報告

◆麻生フィルハーモニー管弦楽団 第71回定期演奏会

10月25日、大ホールで開催されました。麻生フィルとしては、4月と7月の演奏会は中止だったので1年ぶりの演奏会でした。準備開始した時は、まだ政府のクラシックコンサートのガイドラインが客席定員半分だったので、客席は市松模様状に使う指定席にしたため、当日舞台から客席を見ると斜め状にふさがっている・・ちょっと不思議な世界でした。

曲目はモーツァルトの「魔笛」序曲、ミャスコフスキーのチェロ協奏曲、そして、チャイコフスキーの交響曲第2番でした。チェロ協奏曲で独奏した伊藤悠貴さんの演奏はとても素晴らしく、音響のあまりよくないホールにも拘らず、「後方の席でもとてもよく響く音色が素晴らしく、とても楽しめた」との声もありました。「久しぶりにホールで聴く音楽会、心が豊かに満たされた」との感想もあり、観客を入れた演奏会を実施してヨカッタ！と思いました。

（横須賀 朝子）

麻生フィルハーモニー管弦楽団 第71回定期演奏会

◆第36回詩吟大会

10月25日、大会議室で開催された第36回詩吟大会は、新型コロナウイルス対策のため、観客席の間隔をとり、舞台も、例年とは異なり、連吟・剣舞は行わず、すべて個人の出場とされた。こうしたことで、声が朗々と響き、かえって会場に厳粛な雰囲気が出ていた。

（関森 田鶴子）

第36回詩吟大会

◆美術工芸展

10月30日～11月4日（11月2日は休館）、市民ギャラリーにて開催された。

例年のように、会場の入り口には来場者をお迎えするように生け花が展示された。壁面には、絵画・書・写真・絵手紙が並び、展示台には陶芸・彫刻が並べられ、来場者の目を楽しませてくれた。5日間の会期中、天候にも恵まれ来場者は約700名を記録した。作品について熱心に質問したり、作品を前に制作者と参観者が和やかに談笑したりする姿も散見した。

また、会場内には換気用送風機を置き、受付前には、マスク着用はもとより消毒用アルコールが設置されるなど、例年には見られない消毒感染防止対策にも配慮されていた。団体展示として秋水書道会も市民館3階ウォールギャラリーにて展示された。

（小田島 寛）

美術工芸展

◆洋舞

3月8日、かわさき市民芸術祭が中止になってから3カ月、令和2年の麻生区文化祭の開催有無が話し合われ、洋舞は懸念の声もある中、感染拡大防止に万全を尽くし、文化を前進させたい思いで5団体の参加が決定。ホールの利用制限は徐々に緩和されましたが11月の状態の予測は難しく、考えうるさまざまな対策を練り、迎えた本番11月1日は活気溢れる舞台が実現しました。入場者は500名。開催後2週間が経ち、感染が疑われることはなく、無事終了したことに一同胸を撫で下ろしました。指導者と出演者が一丸となり勇気をもって実施した達成感と喜びが、今後に繋がる希望を生みました。観客の方々からは、コロナ禍の中、練習時間も十分に取れないのに質の高い演技で魅了されたなどの感想をいただきました。

（伊藤 胡桃）

洋舞

◆第32回麻生区俳句大会

本年度はコロナ騒動のため、俳句大会を実行できるのか議論のあったところですが、例年とは取り組みをを変え大会当日の席題句会は行いませんでした。それにもかかわらず、ほぼ例年と同じ138名の応募より、478句の応募がありましたことは嬉ばしいことでした。その句を25名の選者に選を戴き、別記のように入賞者9名、優秀賞者20名を決定し、表彰致しました。

入選者の表彰後、佐藤英行さん制作の電子紙芝居「カラスの天国さがし」を上映。おばあさんとカラスの交流を通して高齢社会、高齢者の抱える心の問題を解決していくほのぼのとした作品でした。

ここ6年ほど実施して参りました小学5年生の部は実施できず残念でしたが、明年はコロナ禍も納まり、通年通りの俳句大会が実施できることを願うばかりです。

（山室 茂樹）

【入選句】

○川崎市長賞
村人になりきってゐる案山子かな　橋本 周

○川崎市議会議長賞
色変えぬ松や百寿の筆さばき　角田 珠子

○川崎市教育委員会賞
よき距離を日傘で保ち立ち話　小沢 卯月

○麻生区長賞
八ヶ岳覆ひて余る大銀河　早川 靖子

○麻生市民館長賞
眠る児に母の団扇も眠りけり　安楽 昌泰

○川崎市総合文化団体連絡会理事長賞
一握の砂に残りし暑さかな　池内 英夫

○川崎市観光協会会長賞
白靴を弾ませ銀座絵画展　水野 盛雄

○麻生観光協会会長賞
屯田兵の墓標のごとく遅桜　来生 慶子

○麻生区文化協会会長賞
咲き群れし千草に風のロンドかな　秋場 正美

【優秀賞】

遠き日のサイン・コサイン蚊遣香　神宝 浩
この水にいのちを託す田植かな　佐藤 次郎
陽の満てる麻生の丘や柿紅葉　長谷川 たけし
わだつみの声か海鳴り敗戦忌　梶野 貴久子
仏名の妻帰り来て盆三日　本玉 秀夫
人生の縮図の背中夕端居　谷 文香
水を打つ女将の白き割烹着　塩澤 烈子
夜学終へ「またね」と手話の笑顔かな　滝澤 義忠
厨にはくりやの染みの古団扇　野口 和子
終戦日父シベリヤを他言せず　花輪 佳子
我が影を雲海に曳く縦走路　都留 嘉男
名水に豆腐泳がし涼新た　高松 たまき
筆太の兜太の色紙夏座敷　藤森 成雄
壁の花旅に出られぬ夏帽子　松崎 香苗
ふるさとの山河壊して梅雨明ける　玉川 孝月
孫が来る素足のあぐら開けて待つ　馬場 身江子
初蝶や聖火リレーの道路地図　横川 はつこう
大牡丹おのれの影に崩れたる　飯川 三無
虫干や捨てかねてゐる写真帳　滋野 暁
どくだみや白き星降る野辺にあり　斉藤 きのと

舞台衣装の女優さんを描くデッサン会報告

10月31日の午後、麻生市民館大会議室で7月から延期されていた恒例のデッサン会が開催されました。モデルは、劇団民藝の女優さんお二人、白石珠江さんと戸谷友さんです。9月24日～10月4日、紀伊國屋サザンシアターで行われた公演「ワーニャ、ソーニャ、マーシャとスパイク」に出演された時の衣装だったので、とても存在感があったと好評でした。参加者は29名でした。指導は麻生区美術家協会の佐藤英行さん、千葉純子さん、三村修一さんと筆者でした。

（佐藤 勝昭）

「第17回あさお古風七草粥の会」コロナ禍で今年は動画・パネル展

無病息災を願う新春の風物詩「あさお古風七草粥の会」もコロナ感染拡大には克てず、残念ながら中止となった。そこで、代わる取り組みをと、事業委託元の区役所と昨秋より企画・打ち合わせを重ね、これまでの活動を、伝統文化を語る動画とパネル展示にして、広く市民に伝えることとした。

パネル展の印刷はエリアブレイン、動画の撮影は映画大学の協力により完成し、区役所ロビーにて、12月23日～1月7日まで展示できた。ご覧いただいた方々からの反応は好評であった。

危機を好機に。他との連携など「新しい風」が吹いたのではないだろうか。

（橋本 周）

会員の活躍

佐藤勝昭さん「第17回個展」

麻生区文化協会の役員である佐藤勝昭さんの個展が、11月21日～29日までお茶の水のアートギャラリー884にて開催された。今回は紺綬褒章の受章を記念して昨年滞在されたというプラハの街の風景を中心にした油彩、水彩の20余点の展示。圧巻はF100号の「モルダウの橋なみ」、緑の中の赤い屋根の街の向こうに滔々と行くモルダウに架かる橋なみ、佐藤さんらしい明るく暖かい色彩の大作。例年に違わず多くの来場者があり盛会であったいう。私も佐藤さんの解説を頂きながら嘗て訪れた彼の地の思い出に浸る贅沢な時間を過ごさせて頂いた。一句謹呈。

プラハの絵並ぶ個展にゐて小春　はっこう

個展会場にて

（横川 博行）

「カフェ・グランデあさお2020」俳句大会に多くの子どもが参加

11月28日、新百合トウェンティワンホールで「カフェ・グランデあさお2020」が開催されました。毎年2回、あさお芸術のまちづくりに関わる区内の芸術文化団体が交流を深めていますが、より多くの市民に参加してもらおうと昨年度から開かれています。今年は芸術文化のまちづくりを次世代につなごうと、子育て世代の参加に力を入れました。消毒や密を避ける徹底したコロナ感染防止対策を行い、各団体のワークショップやステージでの公演は、参加団体35、104名のスタッフによって、146名の親子連れの参加者に麻生の芸術文化の取り組みを堪能してもらいました。

麻生区文化協会は、「子ども俳句大会」をアカデミー部の協力で行いました。17名の子どもが参加し、「季語がたのしい五七五」の指導を受けて、きくのはな、みかんので、いちょうの木など、俳句をひねり出していました。

（板橋 洋一）

「第7回あさお写遊会」

第1回より「あさお古風七草粥の会」に合わせて実施し、年始を飾る写真展として定着してきた「あさお写遊会」。今年は七草粥の会は中止になりましたが、写遊会は市民館の感染予防対策を厳守して、1月8日～13日に麻生市民ギャラリーにて開催しました。

文化協会美術工芸部所属メンバーを中心とする8人の会員は、日々好きな写真を気ままに楽しみながら撮りためています。一人4点を出品しますが、撮りためた写真の中から絞り込むのは楽しみでもあり、苦しみでもあります。撮影者の写真に対する考えや自然の見方が示されるからです。

作品搬入後、8人で合評会を開き、来場者に互いの作品を説明できるよう準備しています。

タウンニュース紙の紹介記事や案内状などのおかげで、約400人が来場。コロナ禍で文化イベント中止が相次ぐ中、写真展を開いてくれて嬉しかったという声も聞かれました。

第7回あさお写遊会

（小田島 寛）

文化協会のこれから

アルテリッカ新ゆり美術展

◆3月1日(月)～7日(日) 10時～18時
新百合トウェンティワンホール
※入場無料、最終日は16時まで

麻生区文化協会・麻生区美術家協会と川崎市文化財団の合同主催で行われる恒例の美術展。絵画・彫刻・工芸・写真・いけ花の他、劇団民藝の女優さんを描くデッサン会作品展示もあります。

文化サロン部主催 文化講演会「新型コロナウイルス感染症の現状と市民生活」

◆4月17日(土)14時30分～16時30分
麻生区役所　第1・2会議室
※文化協会総会終了後

川崎市健康安全研究所所長として川崎市はもとより、内閣官房参与として日本の感染症対策にも大きな影響を与え続けている岡部信彦氏を講師に迎え、新型コロナウイルス感染症の正しい知識を学びます。分かりやすいお話の後には、質問コーナーも設けます。

講師　岡部 信彦 氏

編集後記

今号発行の頃には、コロナ禍は収束するだろうとの願いは虚しく終わり、令和3年は更なる感染拡大、そして2回目の緊急事態宣言が出された。相変わらずの不安と緊張、そして自粛生活に閉塞感がつのり、高齢の身には特に堪える。そんな中、若干の明るいニュースが。新成人124万人の誕生である。震災やコロナ禍を経験した若者達が「医療の道へ」「強い心を育てる教師へ」「地域貢献できる仕事を」などと発言されていて、ピンチをチャンスへという強い意志を感じ、勇気をもらう思いだ。そして、今だからこそ「克己復礼」。私欲・私情に打ち克ち、社会の規範や秩序に従う精神論も大事だと思う。

（橋本 周）

【編集委員】 岩田 輝夫、小田島 紀美（写真）、小田島 寛（写真）、佐藤 勝昭（イラスト）、関森 田鶴子、橋本 周、横須賀 朝子

麻生区文化協会会報 からむし 第69号
令和3年3月1日発行
発行人／麻生区文化協会
会長　菅原 敬子
編　集／麻生区文化協会 広報部
川崎市麻生区万福寺1～5～2
麻生文化センター内
☎044・951・1300
印　刷／㈱エリアブレイン